

グロテスクな欲望：トニ・モリスン作品における越境と融合

井芹，希依

<https://doi.org/10.15017/1931671>

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：



氏 名 : 井芹 希依

論 文 名 : Grotesque Desires: Clashes and Fusion between Incompatible Elements
in Toni Morrison's Works

(グロテスクな欲望——トニ・モリスン作品における越境と融合)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

モリスンはグロテスクを描いた作家か。モリスン作品には一般的な意味（不気味な、恐ろしい、わいせつな）でのグロテスクの表象があふれているにもかかわらず、モリスン作品におけるグロテスクに関する研究は数少ない。そしてその中でも、例えばグロテスクの目的を、アメリカ黒人女性の特殊な立場を明らかにするためのものであるとする Baker の主張は、モリスン文学を黒人女性文学の枠に押しとどめてしまうという問題がある。また Corey のように作品中のグロテスクを肯定と否定に二極化するだけでも不十分である。先行研究の不足の原因には、概念のあいまいさに加え、黒人文学とグロテスクを結びつけることへの批評家の抵抗、つまり人種問題が深く関わっていると考えられる。

「グロテスク」とは定義が難しい概念であるが、本研究ではその本質を、価値をあいまいにするもの、と考える。例えば、『青い目がほしい』のチョリーが、愛ゆえに娘をレイプした、とモリスンが表現する時、彼の行為は読者の愛／暴力の価値観を超えているために、我々は彼の行為を善／悪の二項対立の枠組みで受け止めることができない。このあいまいさこそがグロテスクである。さらに本研究では特に、暴力、食欲、性などの、他者との身体的関係における欲望を「グロテスクな欲望」と定義する。本研究の目的は、モリスン作品におけるグロテスクな欲望が、既存の価値を解体する仕組みを明らかにするというものである。このグロテスクな欲望は、善／悪、生／死、愛／暴力、動物／人間、そして黒人／白人といった二項対立の境界を無効化する、越境的な性質を秘めていると考えられる。そして様々な形態のグロテスクな欲望の中で、作品中に繰り返し登場するのが、女性登場人物たちが抱く、他者との融合への強烈な欲望である。モリスン自身が作品の一貫したテーマであると主張する「愛とアイデンティティの追及」とは、さらに具体的に言うと、実のところ、他者との関係において自己をどう形成するか、という自己と他者の距離の問題を指しているのである。このある意味「普遍的」とも言える「自己と他者の境界」の問題は、モリスンが作家になる以前に修士論文において追及したテーマであり、彼女の創作の根源にあると言えよう。

Part 1 「ヴァージニア・ウルフとウィリアム・フォークナーとの間テクスト的なつながり」

では、モリスンが修士論文で扱った二人の作家の作品と合わせてモリスン作品を読み解くことで、モリスンと彼らとの深い結びつきを探る。ウルフについてはモリスンの第二作『スーラ』と合わせて『ダロウェイ夫人』を取り上げることで、『スーラ』はモリスンが「自己と他者の境界」という問題において、『ダロウェイ』を描き直した作品であることが明らかになる。一方フォークナーについては、『アブサロム、アブサロム！』が（おそらくモリスンも意識していなかったことではあるが）、第三作『ソロモンの歌』と、登場人物たちが矛盾に引き裂かれるグロテスクな状況において類似していることが分かる。Part 2 「一貫した自己を求めて——女性登場人物の鳥の表象」では、モリスン作品における女性主人公たちが、「野生」というグロテスクな特徴を取り戻すことで一貫した自己を取り戻す過程を検証する。第一作『青い目がほしい』の、翼を失った小鳥であるピコーラから、第五作『ビラヴィド』において、翼を広げて子供たちを殺そうとするセサを通じて、第九作『マーシィ』のフローレンスは、自らの内側の荒野へと飛び立つことで、支配的な定義を超越するという意味での自由を手にする。そして最後に Part 3 では、特に第四作『タール・ベイビー』と第七作『パラダイス』において、グロテスクな欲望としての食の表象が、階級、人種、ジェンダーの社会規範に加え、自己と他者の境界までもあいまいにする力を発揮することを明らかにする。

以上の研究に共通するのは、モリスンが男女の対立と葛藤を描きながら、自己と他者の境界のあり方を模索した、ということである。ポーリーンの虹、スーラの水、ビラヴィドとセサの一体化、そしてディークを食べるコニーのように、自己と他者の融合は、理想的な状態として描かれながらも長続きせず、常に他者への依存と自己の喪失の危険をはらんでいる。モリスンは、他者からの自立と他者との融合の間の葛藤を描き続けた作家だと言えよう。